

## カスパー・ブラウン、フランツ・フォン・ ポッツィとミュンヘン・ビルダーボーゲン

宇佐美幸彦

### はじめに

ミュンヘン・ビルダーボーゲン (Münchener Bilderbogen) はミュンヘンのブラウン・ウント・シュナイダー社 (Braun & Schneider、以下 B&S 社) から発行された「一枚刷り」(約43×34cm)の印刷物で、1848年に第1号が発行され、1898年までの50年の間、2週間に1号ずつ定期的に発行され、その後は不定期の出版となり、筆者の調べた限りでは、1231号まで発行されている。ノイルピーンのグスタフ・キューン社 (以下 GK 社) のビルダーボーゲンと比べると、発行開始時期も遅く、発行の版数も少数であるが、ミュンヘンでは一流の画家が図版を担当しており、作品の質の高さは格段と向上している。それに加えて、B&S 社は1年ごとに集合版としてまとめて単行本形式での出版を行っており、このため図書館などでの保存がなされており、ほぼすべての作品についての資料を比較的容易に入手することができる。またそれぞれの作品の画家についても特定されている。

最初に、ミュンヘン・ビルダーボーゲンの全般的特徴および発行方針について簡単に述べておきたい。まず作品内容のジャンルに関しては、先行したノイルピーンの GK 社では幅広いジャンルが扱われているのに対し、B&S 社では限定的なジャンルとなっている。GK 社の主なジャンルは、(1)宗教的な修養 (聖人画、キリスト教の教えなど)、(2)時事報道 (戦争、内乱、事件など)、(3)市民教育 (アルファベット、図鑑、家庭の幸福、女性の心得など)、(4)文学的娯楽 (文学作品や歌謡の図案化)、(5)王室の讚美 (国王などの肖像画、王室の結婚式、葬式など)、(6)美人画、(7)実用的な台紙 (組み立て紙細工、ゲーム盤、着せ替え人形、人形劇の登場人物としての紙人形、人形劇の舞台背景、射撃の標的など) というように非常に多様であるが、これに対して B&S 社の作品には、直接的に宗

教的な修養を目的とするものや、ニュース的な時事報道は全くと言っていいほど見当たらない。また歴史的な登場人物を除けば、王室の人物も登場しない。若い女性の美しさを讃えることを主要な目的とした作品もない。B&S社の作品は内容的なジャンルからすると、(1)文学的・芸術的な分野と(2)図鑑的・教育的分野に限定されていると行うことができよう(ただし、おそらく財政的に大いに儲けが見込まれたのであろうが、射撃の標的として実用的な作品はいくつも発行されている)。

おそらくB&S社の発行方針として、生臭い政治的なかわりを離れ、フィクションの世界を取り入れることによって、芸術的な香り高さを誇るという点に重点が置かれたように思われる。この内容的な限定と、制作者として一流の画家を動員したことは深い関係にある。GK社のように素人っぽい、ごつごつした筆致の図版ではなく、GK社はシュヴァイント(Moritz von Schwind)ら当時の一流画家や、ミュンヘンの芸術アカデミーで学んだ若手の才能ある画家に図版を依頼し、非常に洗練された図版の作品を刊行した。ビルダーボーゲンという安価な大衆の刊行物に芸術的な質の高い作品を掲載するというのが、B&S社の基本の発行方針であったようである。このため同社は、時事的なニュースによって作品の芸術性が低められることを避けようとしたのではないだろうか。

作品の内容的な特徴として、B&S社の作品には全般的に、鋭い諷刺の精神とユーモアが貫かれていることも指摘できよう。この点は、おそらく宗教的な修養や、現代的な支配者(王室)を避けたことと関連しているように思われる。また教育的な作品においても、GK社(とりわけ創業者グスタフ・キューンの初期の時代)のビーダーマイア的な家庭の幸福や女性の従順を強調するような傾向はみられない。もちろん子供向けのことわざやABCを扱う作品では、学校教育的な「教え」が描かれているが、それと並んで、皮肉や批判精神にあふれた作品も多く、GK社の教育的作品とはめざす方向がかなり異質であると言えよう。つまり19世紀的な家庭教育・女性教育という古い体質を拭い去り、B&S社はより人道主義的で、体制批判的な側面を示したと指摘できよう。本稿ではまずブラウンとポッツィについて具体的な作品を観察したい。

## (1) カスパー・ブラウン

ミュンヘン・ビルダーボーゲン第1号の制作者はカスパー・ブラウン (Kaspar Braun, 1807-1877)<sup>1</sup>である。ブラウンはB&S社の経営者でもあったが、芸術家としても活躍している。B&S社はビルダーボーゲンの発行に先立って、ユーモア雑誌『フリーゲンデ・ブレッター』(Fliegende Blätter, 1844-1944)を創刊したことでよく知られ、また単行本としても数々のユーモアあふれる書籍を発行したミュンヘンの重要な出版社であった。ブラウンはその経営責任者を長年にわたって務めあげたことから、相当な経営的手腕を持った人物であることが分かる。ブラウンの功績は経営者として事業的な成功を収めたことにとどまらない。彼の本領は若手の芸術家の発掘・育成という点で大いに発揮されたのである。自らも絵筆をとる芸術家として、若手の才能に対する批評眼はたいへん優れており、ミュンヘンの芸術アカデミーで学んだ才能ある若手画家たちを登用し、このミュンヘン・ビルダーボーゲンや雑誌や単行本の挿絵を担当させたのである。しかしそうした経営者・組織者としての活動と並行して、芸術家としても自ら作品を制作しているので、まずこの人物の作品から詳しく観察したい。

ブラウンは1807年にアシャッフエンブルクで生まれたが、ギムナジウム修了後、ミュンヘン芸術アカデミー(美術大学)でコルネリウス(Peter von Cornelius, 1783-1867)の下で絵画を学んだ。卒業後は、北ドイツやハンガリーなどの各地を旅行し、古城などのロマンティックな題材の絵を描いた。1838年に、当時ヨーロッパの最も優れた版画家と言われたフランスのルイ・アンリ・ブレイヴィエール(Louis-Henri Brévière)のアトリエに入り、版画の修業をした。ここで習得した技術をもとに、1839年にミュンヘンに帰り、木版画印刷所を設立した。1843年にはフリードリヒ・シュナイダー(Friedrich Schneider, 1815-1864)と共同で、ブラウン・ウント・シュナイダー社を出版社として創設した。シュナイダーはレー

---

1 Vgl. Hyacinth Holland: Braun, Kaspar. In: *Allgemeine Deutsche Biographie (ADB)*. Band 47. Duncker & Humblot, Leipzig 1903, S. 198-203. Von „[http://de.wikisource.org/w/index.php?title=Kaspar\\_Braun&oldid=1838628](http://de.wikisource.org/w/index.php?title=Kaspar_Braun&oldid=1838628)“

ゲンスブルクの書店で働いていた経営能力に優れた人物であった。この会社が1844年から雑誌『フリーゲンデ・プレッター』を発行し、また1848年からはミュンヘン・ビルダーボーゲンを発行して大きな事業的成功を収めたのである。1864年に長年の親友であり共同経営者であったシュナイダーが亡くなってからは、ブラウンはもはやかつてのようなユーモアにあふれる作品を生み出すことができず、会社の経営は息子に任せ、心臓疾患に苦しんだ晩年を過ごして、1877年にミュンヘンで死去した。ブラウンは合計25点のビルダーボーゲンの制作にかかわった。単独で制作した作品が17点で、共同制作が8点である。ブラウンの作品を一覧表にすると次のようになる。

版番号	表 題	図版画家	備 考	制作年
MU-00001	Der Gockel	K. Braun	メルヘン	1848
MU-00007	Das Lied von der Gans	K. Braun	歌謡	1848-49
MU-00009	Allerlei für gute Kinder	K. Braun, J. Rehle	風俗画	1848-49
MU-00010	Das Zauberpferd	K. Braun	歴史的物語	1848-49
MU-00014	Die Geschichte von der großen Wurst	K. Braun	歴史的物語	1848-49
MU-00018	Eine lustige Gesellschaft	K. Braun, F.v. Pocci, C.H. Schmolze, C. Stauber	滑稽画	1848-49
MU-00021	Soldatenleben, Dreißigjähriger Krieg	K. Braun, A. Muttenthaler, C. Stauber	軍隊の歴史	1848-49
MU-00028	Städte und Landschaften	K. Braun, A. Muttenthaler, C.H. Schmolze, C. Stauber	風景	1849-50
MU-00033	Sprichwörter	K. Braun, J. Rehle	諺	1849-50

(次ページに続く)



版番号	表題	図版画家	備考	制作年
MU-00034	Eine gemischte Gesellschaft	K. Braun, A. Muttenthaler, F.v. Pocci, J. Rehle, C.H. Schmolze, I. Stölzle, C. Spitzweg, C. Stauber	滑稽画	1849-50
MU-00045	Herr Poschius und sein Rock	K. Braun	ユーモア物語	1849-50
MU-00047	Die große Rübe	K. Braun	メルヘン	1849-50
MU-00073	Die gebatene Gans	K. Braun	ユーモア物語	1851-52
MU-00075	Das weise Sprüchlein	K. Braun	メルヘン	1851-52
MU-00090	Erinnerung an das Leben im Gebirg	K. Braun, C.H. Schmolze, M.v. Schwind, C. Stauber	風俗画	1851-52
MU-00092	Verschiedene Bilder	K. Braun, W. Lichtenheld, A. Muttenthaler, C. Stauber	風俗画	1851-52
MU-00107	Die Bauernkirchweih	K. Braun	祭り、影絵	1852-53
MU-00111	Das Gastmahl	K. Braun	饗宴、影絵	1852-53
MU-00120	Der Jahrmarkt	K. Braun	祭り	1852-53
MU-00128	Laterna Magica, Zauberbilder (1)	K. Braun	メルヘン風幻影	1853-54
MU-00129	Laterna Magica, Zauberbilder (2)	K. Braun	メルヘン風幻影	1853-54
MU-00143	Die Geschichte von dem verführten Kätzlein (1)	K. Braun	動物物語	1853-54
MU-00144	Die Geschichte von dem verführten Kätzlein (2)	K. Braun	動物物語	1853-54
MU-00167	Der böse Hund (1)	K. Braun	動物物語	1854-55
MU-00168	Der böse Hund (2)	K. Braun	動物物語	1854-55

ここでは単独制作の作品の中から、物語的な展開を内容としている主要な作品について紹介し、検討してみたい。

(1-1)「おんどり」

「おんどり」(MU-00001-Der Gockel)<sup>2</sup>はミュンヘン・ビルダーボーゲンの第1号として、ブラウン自らが筆を執ったものである。作品は9つの小さな図版から構成されていて、主人公の「おんどり」が「成長」し、いろいろな事件を起こす場面が描かれている。主人公の「おんどり」は人間の子供のように擬人化されて描かれており、状況はメルヘン的な非現実性の中に設定されている。

まず第1画面であるが、農民の夫婦があるとき巨大な卵を見つける。この卵は人間の体の半分ほどの大きさがあり、とても鶏の卵とは思えない。この巨大な卵の出現からしてすでに非現実的なフィクションの設定だということが明らかになる。第2画面で卵からひながかえり、それは「全く普通のおんどり」だったという説明があるが、次の第3画面を見るとわかるように、このひなは大人の半分ぐらいの大きさがあり、とても「普通」ということはできない。

夫婦はこの「おんどり」を実の(人間の)子供として育て、その「成長」がこの作品の展開部分である。第1画面で夫婦はこの不思議な大きな卵を発見した時、この「きれいな卵」からは「きっと特別なものが生まれるに違いない」と期待し、第2画面でひなが生まれると、「たいへん素晴らしい」と思うってしまう。だが作者は、この誕生の時から、このおんどりが「全くの悪者」であり、夫婦は思い違いをしていたと説明する。第3画面ではひなは「ぞっとするようなひどい声」で鳴き始めるが、「父親」の農夫は「うちのおんどりは何てすばらしい声で歌うのか」と言う。第4画面では「母親」がエプロンをしたおんどりにスプーンで食事を与えているが、おんどりは足でフライパンを蹴りとばし、行儀が悪い。しかし「母親」は「うちのおんどりは丸々太ってきた」と言う。第5画面でおんどりは教科書やノートやインクつぼを蹴りとばし、勉強をしない悪い子供のように振舞っている。しかし「父親」は「うちのおんどりはもう十分に賢いのだ」と言う(Abb. 1)。第6画面でおんどりは皿やガラス瓶などの食器を床一面に投げつけ大暴れの様子である。でも

---

2 Münchener Bilderbogen, Nro. 1, Der Gockel, Braun & Schneider, München.





Abb. 3. プレンターノ『ゴッケル』におけるブラウンの挿絵

ブラウンはドイツ・ロマン主義文学の代表者クレメンス・プレントナーの『ゴッケルとヒンケル』（*Gockel und Hinkel*, 1811年以降執筆、1838年出版）を意識していると考えられる。単に意識をしていたどころか、ブラウンはこのプレントナーの作品の挿絵を担当しており<sup>3</sup>、熟知していたと言った方が正確であろう（Abb. 3）。

しかしプレントナーの物語が中世的な騎士の世界を舞台として幻想的な筋の展開をしているのに対して、ブラウンはこうした幻想をわざわざ破壊しているように見える。メルヘン的な設定であるが、グリムのメルヘンのように、主人公の立場への感情移入や非現実的な（魔法の力、あるいは魔法からの解除などによる）ハッピーエンドは見当たらない。むしろ冷酷なまでに主人公の悪者ぶりが描きだされている。この作品の「教訓」はおそらくあまりに子供を甘やかしてはひどい子供にしか育たないので、親は子供を厳しくしつけなければならない、と言うことであろうが、それにしても生まれた瞬間から「全くの悪者」と決めつけるのは行きすぎではないだろうか。こうした極端な幻想の廃止と、現実の厳しさの直視は、おそらくロマン主義的な風潮に対するアンティテーゼなのであろう。この意味でこの作品は「アンティ・メルヘン」と規定すること

---

3 Vgl. Clemens Brentano: *Gockel Hinkel Gackeleia, Märchen, Mit Initialen und Lithographien von Caspar Braun nach Entwürfen von Clemens Brentano, inseltaschenbuch 47, 1977 (2. Aufl.), Insel, Frankfurt/M.*

ができよう。

この幻想的な設定を前提として、それをひっくり返し、ブラック・ユーモア的な結末を持ちこむという、強烈な諷刺的作風はこの作品に限らず、ミュンヘン・ビルダーボーゲンの多くの作品に共通する基本路線になっているようである。

## (1-2) 「ガチョウの歌」

「ガチョウの歌」(MU-00007-Das Lied von der Gans)<sup>4</sup>は1連3行のわらべ歌風の詩(合計7連)に7つの小さい図版が描かれている作品である。全ての連が「ガチョウが […] に乗せているものはなんだ?」という最初の行で始まる。 […] の部分にはガチョウの身体の部分が入り、第1連から順に、くちばし、頭、背中、おなか、つま先、しっぽ、足である。しかしその乗せているものは現実にはありえないものばかりである。

第1連から順に、「サーベルを持った騎士」、「甕(かめ)を持った太ったコック」、「杖をついたおばあさん」、「ホースのついたワインの樽」、「シャツを縫っている娘」、「婚礼の花輪を持った娘」、「花婿を迎える花嫁」である。一体どうしたら、重い鎧に身を固め大きな刀を振り回す騎士をガチョウがくちばしで持ち上げることができようか。全く非現実的な設定であるが、図版(第1画面)(Abb. 4)はこのナンセンスな姿をギャグ漫画のように描いている。おそらくありえない光景を絵に描くことによって、ブラウンはこの作品を見る人を驚かせようとしているのであろう。

この作品でも一面ではロマン主義的な世界へのブラウンの愛着が感じられる。中世の騎士や、魔法使い風のおばあさん、幸せな結婚をする娘のような登場人物の設定はすぐにメルヘン的な状況設定だと直感することができる。第2画面の大きな甕を持ったコックや第4画面のワインの樽の下でグラスを持ちあげて乾杯しているコピトもメルヘンによく登場しそうな人物である(Abb. 5)。ガチョウも、「ガチョウ番の娘」などメルヘンではおなじみの動物である。この作品では、非現実的なガチョウ

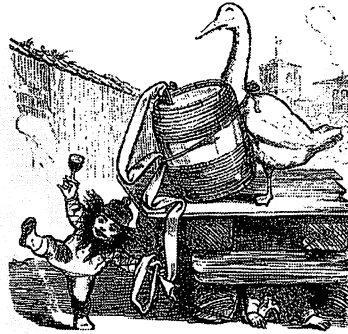
---

4 Münchener Bilderbogen, No. 7, Das Lied von der Gans, Braun & Schneider, München.



Was trägt die Gans auf ihrem Schnabel? ...  
Einen Ritter mit sammt dem Sabel.  
Trägt die Gans auf ihrem Schnabel.

Abb. 4. MU-00007-Das Lied von  
der Gans (第1画面)



Was trägt die Gans auf ihrem Bauch? —  
Ein altes Weinsäß mit sammt dem Schtauf.  
Trägt die Gans auf ihrem Bauch.

Abb. 5. MU-00007-Das Lied von der  
Gans (第4画面)

の運ぶものは第5連からは可憐な娘に集約されていき、最後には結婚式へと進展するのであるから、歌詞だけを見れば、この「ガチョウの歌」は、メルヘン仕立ての幻想的な幸せを呼ぶガチョウを讃える単純な子供の夢を歌った作品のように見える。

しかしこうした幻想的、非現実的な夢の世界は第7画面の図版によって破壊される。このビルダーボーゲンでは図版は上下に3段に分かれ、1段目と2段目はそれぞれ3つずつの小さい図版が描かれているが、一番下の第3段は横長の図版が一枚掲載されているだけである。つまり第7画面は、他の図版の3倍の大きさで、それだけ強調されていると考えることができる。この最終図 (Abb. 6) では、左端にガチョウが立ち、その足の上に花嫁姿のきれいな娘が乗って右側へ向かっているが、図版の右側から歩いてくる花婿の一行は美しい幻想とは全く異なる姿である。図のほぼ中央に立ち、花嫁に挨拶している花婿は鼻が異様に飛び出して、鼻の下が大きく伸びており、美男子とはかけ離れた風貌で、髪の毛は頭の上で数十センチもあろうかと思われるほど塔のように立ちあがっており、耳にはイヤリングをつけて、チャラチャラの飾りを全身につけたイカレポンチの様相である。その後ろに、つき添いの紳士二人が立っているが、いずれも団子鼻で目じりが下がり風采の上がない顔つきである。



Abb. 6. MU-00007-Das Lied von der Gans (第7画面)

画面の右端には楽団の4人がホルン、ヴァイオリン、フルート、小太鼓という楽器を演奏しているが、いずれも変人のような顔つきである。ブラウンは結婚というものに幻想を持つなど言いたいのであろうか。あるいはおよそ儀式など下らないものだと言いたいのであろうか。少なくともブラウンがロマン主義的な幻想の破壊を意図していたことはこの図版から見てとることができよう。

### (1-3)「魔法の馬」

「魔法の馬」(MU-00010-Das Zauberpferd)<sup>5</sup>では、ブラウンの歴史的な騎士世界へのロマン主義的愛着が示されている。これは実際の歴史に題材を取り、メルヘン風に仕上げた作品である。図の構成はコマワリ風の機械的な分割を排除し、大胆に大きな絵を中央に配置し、その左右に縦に3段ずつ3つの小さな図版が置かれて、大小7つの図版が描かれている。まずテキストに注目してストーリーを見てみよう。

昔、二人の騎士がいた。二人は若いころからの親友であった。一人はフリードリヒという名で、オーストリア人であった。もう一人はルートヴィヒと言い、バイエルン人であった。二人の友情は長い間続いたが、ドイツ皇帝ハインリヒ7世が亡くなったときについに

5 Münchener Bilderbogen, Nro.10, Das Zauberpferd, Braun & Schneider, München.

途絶えた。この時二人はドイツの王位に就こうと争ったのだ。こうして竹馬の友同士の間で大きな戦争が始まったのだ。流血の戦いの末、フリードリヒは敗れ、捕虜として捕えられてしまった。フリードリヒは厳重な護衛をつけられ、人里離れた寂しい塔に、閉じ込められた。念入りに監視されていたので、逃亡などは考えられないことであった。フリードリヒにはレーオポルトという弟がいた。レーオポルトは兄の不運を聞き、大いに悲しんで、どうしたら兄を助けることができようかと、あれこれ考えた。何一つよい考えがなかったので、レーオポルトは魔法使いを呼び寄せ、フリードリヒを助け出したら、500グルデンと6本のワインと新しい上着を与えようと、約束した。魔法使いは大いに満足し、もしフリードリヒが私の望んだように行動すれば、大いにかたじけないことである、と言った。

レーオポルトが魔法使いと話をしていたその夜、フリードリヒは寂しい塔に悲しそうに閉じ込められ、自分の不運についてくよくよ考えていた。夜の11時15分くらい前のことであった。すべては寝静まっていた時、突然、扉をノックする音がした。「おはいり」-「夜分にごめんくだされ」という言葉とともに魔法使いが部屋に入ってきた。「あなたは誰ですか。ここで何をしようというのですか」とフリードリヒは言った。「私はあなたをここから連れ出し、あなたの味方の人々の所へお連れするためにやってきました。」「この塔は厳重に鍵が閉ざされ、戦士たちによって見張られているのに、どうしてそんなことができましょうか。」「窓の所へお進みください。ごらんなさい、そこには黒い魔法の馬がいて、せかせかといなき、屋根の瓦を蹴って足ふみしています。あなたがその背中に乗ると、馬は疾風のごとく夜を飛び、あなたの味方の人々の所へ送り届けます。」その時、いまわしい気分がフリードリヒの頭を取り巻いた。フリードリヒは言った、「魔法使いよ、私の望みは、あなたがその魔法の馬とともにすぐさま消えさることだ。このようなくだらないことを私は軽蔑する。さあ出て行ってくれ。私は必ずや神の助けで再び自由になれよう。」そして本当にそうなった。朝が明けるや否や、使者が塔に早馬でやってきて、手綱を緩め、書状を渡した。その書状には「ルートヴィヒはフリードリヒを自由放免とする。若い時と



同じく二人は再び友人でいたい」と書かれていた。

次に図版を観察してみたい。第1画面（左側上段）ではテーブルの上に置かれた王冠をめぐり、二人の騎士（フリードリヒとルートヴィヒ）が左右に描かれ、二人ともその王冠に手を伸ばそうとしている様子が描かれている。第2画面（左側中段）はフリードリヒが捕えられる場面である。武装した3人の敵の騎士がフリードリヒを地面にねじ伏せている。第3画面（左下段）は槍などで武装した敵の騎士に前後を固められて、フリードリヒが塔の門の中へと連行される場面である。この図版には工夫があって、フリードリヒたちは門の手前の橋の上を歩いているのであるが、その門は真ん中の大きな図版（第5画面）とつながっているのである。つまり、左下（第3画面）と中央（第5画面）の二つの絵は同じ壁を用いて、一体化されているのである。第4画面（右上段）では、左側に騎士が座っており、右側に立った姿の魔法使いが描かれている。座っているのはレーオポルトで、魔法使いにフリードリヒの救出を頼んでいる場面である。第5画面は中央に大きく描かれている絵である（Abb. 7）。ここには他の図版の3つ分のスペースを使い上から下まで大きな塔が描かれている。この塔の上の方に窓があり、その中に幽閉されているフリードリヒと救出に来た魔法使いの姿が見える。その窓の手前の空中に、つまり作品全体のほぼ中央に空を飛ぶ黒い「魔法の馬」が描かれている。馬は大きな鼻息をはき、目をららんと輝かせ、たてがみや大きな尻尾の毛を逆立てて、4つの足をかき鳴らし、首をやや下げて今にも走りだしそうな躍動的な姿



Abb. 7. MU-00010-Das Zauberpferd（第5画面）

で描かれている。この中世風の城の塔の形といい、馬の描き方といい、ロマン主義的な絵画で鍛えた画家ブラウンの面目躍如という卓越した絵である。第6画面（右中段）は手に書状を持って早馬で駆ける使者の姿を描いている。第7画面（右下段）は無罪放免となったフリードリヒが、盛装の騎士姿でマントを翻し、馬で走っていく姿を描いている。

この話はドイツの中世の歴史に題材を取っている。ドイツ皇帝ハインリヒ7世（ルクセンブルク家）（Heinrich VII., 1274-1313）は1313年に亡くなり、その後継をハプスブルク家（オーストリア）のフリードリヒ3世（Friedrich III., 1289-1330）とヴィテルスバイ家（バイエルン）のルートヴィヒ4世（Ludwig IV., 1282-1347）が争ったのである。1314年10月20日のフランクフルト選帝侯会議ではルートヴィヒがドイツ王に選ばれたが、その前日の10月19日にはザクセンハウゼンでフリードリヒが国王に選ばれたのである。このため内紛が続き、武力衝突となった。1322年9月のミュールドルフの戦いでフリードリヒは敗れ、捕えられて、上部プファルツのトラウスニツ城に幽閉された。この幽閉は1325年まで続き、両者の間で協定が成立し、ルートヴィヒ4世が神聖ローマ皇帝としてイタリアをおさめ、フリードリヒ3世がドイツ王としてドイツを統治することとなった。

ブラウンの作品では、詳しい歴史的な年代が記載されていないので、ハインリヒ皇帝が亡くなってすぐに戦いがおこり、フリードリヒが幽閉されるとすぐにレーオポルト（Leopold I., 1290-1326）が救出に動き、その翌日にはもう和解が成立したかのように説明がなされているが、実際には、前皇帝がなくなってから、選帝侯会議が開かれ、戦いが始まり、フリードリヒが捕えられるまでに9年間、フリードリヒ捕囚の期間が3年間、最終的な和解は1326年のことなので、フリードリヒが権力の座につくまでにはさらに1年という期間が経過していたのである。

この作品ではブラウンの中世への愛着が強く表れている。他の作品のように、皮肉っぽい描き方はせず、フリードリヒは魔法使いの助けのような邪悪な方法ではなく、神への信仰というキリスト教徒としての正しい道を選択することによって、神の恩寵により、ルートヴィヒとの友情が復活し、救済されたとされている。ゲーテのファウストのように悪魔と結託し、大胆な冒険を行うという展開に持ち込まなかった理由は、お

そらくブラウンには中世の歴史的な国王や騎士には敬意を払おうとする気持ちが強かったのであろうと推測される。ブラウンは、作品に実際の歴史上の人物を登場させたときは、全くのフィクションの登場人物とは慎重に区別して取り扱っていると思われる。

#### (1-4) 「大きなソーセージの話」

「大きなソーセージの話」(MU-00014-Die Geschichte von der großen Wurst)<sup>6</sup>は同業組合(ギルド)の歴史に関連した、歴史ものの作品である。テキストは図版とは別に最下段にまとめてられており、次のような内容である。

昔、ドイツに厳しく暗い時代があった。人々の心は暗く悲しい気分が覆われ、古い社会状況は根底から揺らぎ、誰もが将来に不安を抱き、これからやって来る厳しい出来事を恐れていた。この時、ドイツのはずれにある古いケーニヒスベルクの町で、たいへん賢明な長老たちが集まり、どうしたらいいか相談をした。27日間の協議の末、長老たちは意見が一致し、大きなソーセージを作ることを決議した。

直ちに長老の一人がコショウを買うために派遣された。もう一人の長老には必要な塩を手に入れるように指令がなされた。3人目と4人目の長老は農村へ行き、この大企画のために必要な豚を調達して、町へ運ばねばならなかった。さて、すべてがそろったところで、豚は解体されてひき肉にされ、大きなソーセージがこしらえられた。それは由緒正しいドイツ食肉業組合の作法通り、正しい方法で、美味をもたらす期待通りの調理法であった。ついにソーセージができあがったとき、ソーセージは太鼓や笛の音とともに、持ち上げられて、町中を行列とともに運ばれ、その後、厳かに消費された。ソーセージは1005エレ(約670m)の長さ、885ポンド(443kg)の重さ

---

6 Münchener Bilderbogen, Nro.14, Die Geschichte von der großen Wurst, Braun & Schneider, München.

があった。これは1601年、30年戦争の17年前に起こったことであった。

この作品は7コマの異なった大きさの図版で構成されている。上下に4段の構成で、上段には3つ小さい図版があり、左から第1画面は、協議をしている町の長老たち、第2画面はコショウを大きな計りで買っている様子、第3画面は塩の樽を手押し車で運ぶ様子を示している。第2段は2枚の図版があり、左側（第4画面）はブタ飼いのところでたくさんのブタを調達する様子、右側の絵（第5画面）は、豚を解体しひき肉を作っているところを描写している。第3段は一枚の図版（第6画面）でソーセージが完成し町をパレードしている様子が描かれている。右側がパレードの先頭で、指揮者と楽団が盛装して行進し、続いてかわいらしい女の子たちが着飾って花束を持って歩いている。それに続いてナイフとフォークを持った上役（説明はないが、筋の前半部分からすれば市の長老たちであろう）が歩き、そのあとを巨大なソーセージを肩に担いだ大勢の男性たちが並んで町を練り歩いている。4段目の図版（第7画面）も横長の1枚で、長々とした大きなソーセージがつなぎあわされたテーブルの上に乗せられ、のこぎりやナイフやフォークを持ったたくさんの人々に食べられようとしているところである。

おそらくここでブラウンが述べているように、こうした巨大なソーセージのパレードの最初のきっかけは、飢饉や疫病などに荒れ果てた人々を励ます意味で、復興の祭りであったかもしれない。しかしそれはやがて、同業組合の技を誇る祭りへと発展したのではないだろうか。そして都市ごとにその長さや大きさを誇り、記録に挑戦することになったのであろう。ケーニヒスベルク市の記録によれば、すでに1502年に52エレのソーセージが作られたとのことであるから、こうした行事がくりかえし祭りとして開催されたようである<sup>7</sup>。それにしても1601年のソーセージの長さは最高記録で、それが後世に伝えられ、ブラウンがこれをセンセーショナルな面白い「祭り」としてこの作品で取り上げたものと推定される。ブラウンの「歴史」好き、「記録」好き、「祭り」好きの性格が表れていると言えよう。

---

7 Vgl. [http://www.koenigsberger-express.com/main/print.php?a=2&id\\_article](http://www.koenigsberger-express.com/main/print.php?a=2&id_article).



Abb. 8. MU-00045-Herr Poschius und sein Rock (第4画面)



Abb. 9. MU-00045-Herr Poschius und sein Rock (第7画面)

### (1-5) 「ポシウス氏と彼の上着」

この作品 (MU-00045-Herr Poschius und sein Rock)<sup>8</sup>はユーモアと批判精神にあふれるブラウンの最高傑作の一つである。著名で優秀な詩人ポシウス氏がこの作品の主人公である。

ある朝、詩人はくたびれた服を着て家を出た (第1画面)。通りや中央広場で出会った町の人々はポシウス氏に気付かず、誰ひとり挨拶もしない (第2画面)。ポシウス氏はいったん家に帰り、立派な上着に着替えて、再び中央広場へ散歩に出た (第3画面)。するとすべての人々はたちどころに、帽子を取り、近寄って「おはようございます、ポシウス先生。ごあいさつできて光栄です」と次々と丁寧なあいさつをした (第4画面) (Abb. 8)。ポシウス氏は急いで家に帰り、腹を立てて上着を脱いだ (第5画面)。ポシウス氏は上着を衣装掛けに掛けて、「おまえがポシウス先生なのか、私がポシウス先生なのか?!」と上着に怒鳴りつけた (第6画面)。上着は何も答えなかったので、ポシウス氏は「馬子にも衣装だが、立派な男性には衣装が大切ではない」という教えを、力任せにたたき示した (第7画面) (Abb. 9)。

人はともすれば見かけだけで物事を判断し、その中身について十分な理解を示さない。ブラウンはこうした見かけだけの虚栄には反対し、真

8 Münchener Bilderbogen, Nro.45, Herr Poschius und sein Rock, Braun & Schneider, München.

実を正しく判断すべしと訴えているのであろう。外見だけ繕おうとする社会の風潮に対する痛烈な批判である。ユーモアの決定的な面白さは、衣装を見て態度を変える一般市民たちへの怒りを、自分のりっぱな上着への怒りへとずらしているところから生じている。ポシウス氏が怒って、自分のもっとも上等の上着を衣装掛けに掛け、これを鞭でたたきのめし、よれよれにしている様を描く最後の図版はユーモアがあふれて、たいへんすばらしい出来栄である。こうした姿は言葉で語るよりも、図版で示したほうがずっとわかりやすく、かつ面白い。ビルダーボーゲンというメディアならではの作品である。

#### (1-6) 「大きなカブ」

この作品 (MU-00047-Die große Rübe)<sup>9</sup>は8コマからなる昔話風の物語作品である。テキストには次のように述べられている。

昔、フランスの王子がしばしば緑の森へ出かけ、狩りに精を出していた。森の奥には炭焼きが一人住んでおり、王子は狩りに疲れた時に、この人に話しかけ、この人の質素なごちそうを分け合った。それはカブと水であった。王子はやがて王になったが、ある時、炭焼きの老人が町へやってきて、老人が収穫した一番大きくて美しいカブを王に手渡した。善良な王は慈悲深く老人を迎え、老人が安心して老後を暮せるように、ドカーテン金貨千枚の入った袋を与えた。一人の宮廷騎士がこれを聞いており、「国王はちっぽけなカブ一つに千ドカーテンも払った。私が立派な贈り物をすれば、国王は私にいったい何をくれることになるのだろうか」と考えた。すぐに騎士は大きな馬を買い、国王に心からの敬意のしるしとしてこれを受け取っていただけると尋ねた。国王は慈悲深くこれを受け取り、これに対する礼として炭焼きの老人が持ってきた大きなカブを騎士に渡した。騎士はこの価値のない返礼の品にうろたえて、国王にこれは何かのお間違えではないかと申

---

9 Münchener Bilderbogen, Nro.47, Die große Rübe, Braun & Schneider, München.

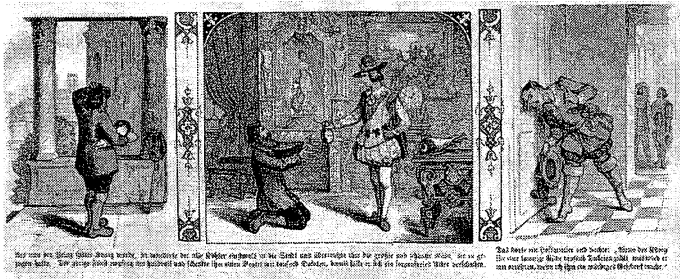


Abb. 10. MU-00047-Die große Rübe (第3、4、5画面)

し立てた。しかし国王は、「友よ、これは間違いではない。そなたはこのカブを大事なものとせねばならぬ。私はこのカブに千ドカーテンも支払ったのだ。」——これが利己心の報いである。

図版も洗練され、完成度が高い。全体は上下に3段になっており、上の段には2枚の図版があり、左の第1画面は大きな木の生い茂る森の中深くを徒歩で歩く王子を描き、右の第2画面は木の下に腰を掛け休む王子と、カブを皿に入れて王子に提供しようとしているひげ面の炭焼き人を描いている。中段は3つの絵があるがいずれも王の城の中で、3つの絵は飾り付きの柱で区切られているが一続きの図版のようでもある。中段左(第3画面)は城の玄関先で大きなカブをわきに抱えた炭焼きの老人が王を訪ねに来たところである。中段の中央(第4画面)では調度品のそろう立派な部屋の中で左側に炭焼き老人が膝をついて座り、右側に立っている王から金貨の袋を受け取る場面が示されている。中段右(第5画面)では城の廊下が描かれており、陰険な顔をした宮廷騎士が左側の扉に耳をつけ、第4画面の部屋でのやり取りを盗み聞きしている(Abb. 10)。下段は3つの図版で構成され、左(第6画面)では立派な白い馬が描かれている。下段中央(第7画面)では城の庭のようなところで王が中央に立ち、右側にかしこまって頭を下げている宮廷騎士に大きなカブを渡そうとしている場面が描かれている。下段右(第8画面)では宮廷騎士が落胆している様子が滑稽に描き出されている。騎士は大きな鼻にカブをくくりつけ、体の前にカブをぶら下げて、頭をかいているので

ある。

この話では、王子と炭焼きの老人は身分の違いを超えて、固い友情で結ばれている。これに対して、保身と出世だけを考えている宮廷騎士は真の友情というものが何かを理解せず、ただ利己心から行動する。この作品でブラウンが炭焼きの老人を王子と対等の人間（友情の対象）として扱っていることは重要であろう。ブラウンは社会の底辺の人々への配慮を持った人物であったと評価することができる。これに対してこの宮廷騎士のような出世主義、利権主義の佞臣・官僚タイプの人物は厳しい批判の対象となっている。

## （２）フランツ・フォン・ポッツィ

ポッツィもミュンヘン・ビルダーボーゲンの初期の発展に大いに貢献した人物である<sup>10</sup>。フランツ・フォン・ポッツィ（伯爵）(Franz Graf von Pocci, 1807-1876) はイタリア出身の貴族ファブリツイウス・エヴァリストゥス・フォン・ポッツィ (Fabrizius Evaristus von Pocci) の息子である。父はバイエルンの宮廷に勤め、フランツが誕生したときには、妃カローリーネ付きの宮廷長官であった。母クサヴェーリア (Xaveria) はドレーズデン宮廷でバイエルン公使を勤めたポシュ男爵の娘であった。大学で法律を学び、シュタムベルクとダッハウで、法律の実習を終えたのち、23歳で行政試補となった。1830年にバイエルン王ルートヴィヒ1世はポッツィを侍従 (Kammerjunker) とし、その後、式部官 (Zeremonienmeister) に任命した。1847年には宮廷音楽監督、1863年にはマクシミリアン2世のもとで上級式部官 (Oberzeremonienmeister)、1864年にはルートヴィヒ2世のもとで、宮内長官 (Oberstkämmerer) というように、3代のバイエルン王に側近として仕えた。中でもポッツィはマクシミリアン2世とはほぼ同世代で、子供時代には遊び友達であった。学生時代から絵画

---

10 ポッツィの伝記については、以下の資料を参考にした。Goepfert, Günther, *Franz Pocci*, Stöppel-Verlag, Weilheim 1988; Tegeler, Gisela (hrsg.v.): *Verzeichnis der Werke Franz von Pocci*, Allitera Verlag, 2007; Czetriz, Annemarie, *Franz Graf Pocci*, Bayerische Vereinsbank, München, 1997.



カスパー・ブラウン、フランツ・フォン・ポッツィとミュンヘン・ビルダーボーゲン

や音楽などの芸術分野でも才能を発揮し、ミュンヘンの人形芝居の発展にも貢献して、カスペルレという道化を主人公とした人形芝居を40以上も書き、人気を博したので、「カスペルレ（道化）伯爵」と呼ばれた。同年代のカスパー・ブラウンとも親しく、雑誌『フリーゲンデ・ブレッター』に協力し、ミュンヘン・ビルダーボーゲンにも29（単独制作26、共同制作3）の作品を寄せている。

版番号	表題	図版画家	備考	制作年
MU-00002	Der schwarze Mann	F.v. Pocci	悪童物語	1848-49
MU-00004	Gaukel-Linchen	F.v. Pocci	悪童物語	1848-49
MU-00006	Der Riese Fratzfressius	F.v. Pocci	メルヘン	1848-49
MU-00012	Die Geschichte vom Peter, der die Schule versäumt hat	F.v. Pocci	悪童物語	1848-49
MU-00018	Eine lustige Gesellschaft	F.v. Pocci, K. Braun, C.H. Schmolze, C. Stauber	滑稽画	1848-49
MU-00034	Eine gemischte Gesellschaft	F.v. Pocci, K. Braun, A. Muttenthaler, J. Rehle, C.H. Schmolze, I. Stölzle, C. Spitzweg, C. Stauber	滑稽画	1849-50
MU-00057	Viele Kindergeschichten gibts hier zu berichten	F.v. Pocci, C. Stauber	風俗画（子供）	1850-51
MU-00082	Bilder und Sprüche	F.v. Pocci	教育、諺	1851-52
MU-00095	Blaubart	F.v. Pocci	ペロー	1851-52
MU-00114	Harlekin und Columbine	F.v. Pocci	影絵	1852-53
MU-00115	Das Einmaleins in Reimen und Bildern（1）	F.v. Pocci	教育、九九	1852-53
MU-00116	Das Einmaleins in Reimen und Bildern（2）	F.v. Pocci	教育、九九	1852-53

（次ページに続く）

版番号	表題	図版画家	備考	制作年
MU-00117	Das Einmaleins in Reimen und Bildern (3)	F.v. Pocci	教育、九九	1852-53
MU-00122	Das Märlein vom kleinen Frieder mit der Geige	F.v. Pocci	メルヘン	1853-54
MU-00154	Allerneuestes Schattenspiel für die lieben Kinder (1)	F.v. Pocci	影絵	1854-55
MU-00155	Allerneuestes Schattenspiel für die lieben Kinder (2)	F.v. Pocci	影絵	1854-55
MU-00156	Allerneuestes Schattenspiel für die lieben Kinder (3)	F.v. Pocci	影絵	1854-55
MU-00160	Was euch gefällt oder Bilder -Allerlei	F.v. Pocci	世界の人物・光景	1854-55
MU-00163	Kinderleben	F.v. Pocci	子供の遊び	1854-55
MU-00171	Bilderbogen-Alphabet (1)	F.v. Pocci	教育、ABC	1855-56
MU-00172	Bilderbogen-Alphabet (2)	F.v. Pocci	教育、ABC	1855-56
MU-00204	Fundevogel	F.v. Pocci	グリム	1856-57
MU-00220	König Drosselbart	F.v. Pocci.	グリム	1857-58
MU-00277	Komische Szenen	F.v. Pocci	影絵	1859-60
MU-00303	Sprichwörter für Kinder (1)	F.v. Pocci	教育、諺	1860-61
MU-00304	Sprichwörter für Kinder (2)	F.v. Pocci	教育、諺	1860-61
MU-00323	Sprichwörter für Kinder (3)	F.v. Pocci	教育、諺	1861-62
MU-00447	Kindersprüche (1)	F.v. Pocci	教育、諺	1866-67
MU-00448	Kindersprüche (2)	F.v. Pocci	教育、諺	1866-67

(2-1) 「黒づくめの男」

ミュンヘン・ビルダーボーゲン第2号は著名なミュンヘンのユーモア作家(同時に画家、人形劇作家)のフランツ・フォン・ポッツィが担当した。「黒づくめの男」(MU-00002-Der schwarze Mann)<sup>11</sup>では真黒な服を着て、真黒な大きな帽子をかぶった男が第1画面に登場する。

テキストは韻文で書かれている。「あの黒づくめの男は誰だろう。壁

11 Münchener Bilderbogen, No. 2, Der schwarze Mann, Braun & Schneider, München.

に梯子を立て掛けて、戸口から家の中に入っていった。梯子はさびしく取り残された。」この好奇心に満ちた言葉は次の詩節に登場する小さい男の子のハンスのものであることが分かる。子供のハンスはふだん見かけない異様な服を着た煙突掃除屋を見て驚いたのであろう。

第2連はハンスのいたずらの始まりである。テキストには、「小さいハンスが走ってやってきて、梯子を一段ずつ上った。とうとうてっぺんに座ると、耳をそばだてた」、とある。煙突掃除屋はいざさつか、打ち合わせのために、いったん家の中に入ったのであろう。その間に、小さなハンスは梯子のてっぺんまで登ってしまったのである。戻ってきた煙突屋は梯子を移動させようとかつぐが、最初はハンスがのっているとは気づかず、すすが梯子に付いてこんなに重いのかと思う。梯子の重さで煙突屋は路上に腹ばいになってこけてしまう。もちろんハンスも上から転げ落ち、それを見ていた人々は笑い転げる。煙突屋はハンスを捕まえ、掃除用のほうきを鞭がわりにして、「これぐらいは我慢しろ」と言って、さんざんぶった。最後の連は作者からこの作品を見る子供たちへの警告である。「この男の名前はスパッツォカミーノ<sup>12</sup>といい、ほうきで叩くのがうまい。だから子供たちよ、この人に悪さをしてはいけない。もしそんなことをすればひどい目に合うよ。」

作品は上下3段、合計7つの小さい画像から構成されているが、形や大きさ、順序などに工夫がなされている。上段には3つの絵が並べられているが、文と対応する第1画面は上段中央で、黒服姿の煙突掃除屋が梯子をかついで歩いていく姿が描かれている。第2画面は上段左である。建物の壁に長い梯子が立て掛けられており、その梯子の前におもちゃの木馬を手を持った男の子が興味深そうにそれを眺めて立っている。梯子の背後では、建物の中へ入っていく煙突掃除屋の足の先だけがまだ見えている。第3画面は上段右である。ハンスは壁に立て掛けられた梯子の最上段に、頬杖をついて座っている。通りには通行人が歩き、通行人たちの前にいる親子連れがハンスを指さしている。中段は3つの絵があるが、筋の展開の順からすると、普通の順序とは逆に右から左へと進行し

---

12 イタリア語でスパッツァカミーノ (spazzacamino) は「煙突掃除屋」である。この作品では Spazzocamino となっている。



Abb. 11. MU-00002  
-Der schwarze  
Mann (第4画面)

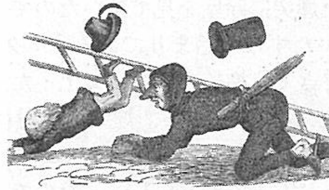


Abb. 12. MU-00002-Der schwarze  
Mann (第5画面)



Abb. 13. MU-00002-  
Der schwarze Mann  
(第7画面)

ている。第4画面(中段右)では煙突掃除屋が梯子をかつぎ、梯子の上にはハンスが座っている(Abb. 11)。第5画面(中段中央)はやや横長で、梯子が横に長く描かれ、その梯子の下に、路上で四つん這いになっている煙突掃除屋と、その左側に梯子から落下するハンスが描かれている(Abb. 12)。第6画面(中段左)はこの滑稽な二人の姿を見て笑う通行人たちが描かれている。下段の図版は1枚だけであるが、両側に合計26行にわたる韻文の説明があり、図版は小さく中央に描かれているだけである。そこでは煙突掃除屋がハンスを逆さづりに左手で持ち上げ、右手でほうきの鞭を振り下ろそうとしている姿が描かれている(Abb. 13)。

ポッツィの作品に登場する子供の主人公は基本的に悪い子供である。グリム童話のようにはじめは弱い立場にあったり、危険な体験をしたりして、そののちにハッピーエンドで終わるというタイプの物語は少なく、たいていはいたずらをした子供が処罰を受けて話は終わる。ポッツィは悪い見本を示して、こうしてはいけないという教訓を示すのである。

ここでは小さな子供に対して、危険な梯子のぼりをしたり、大人(ここでは煙突掃除屋)の仕事の邪魔をしたりしてはいけないという教訓を教えることが、教育的なポッツィの作品の主要な意図であろう。しかしこの作品においては、それを面白おかしく伝えようとする工夫がなされている。一つは真っ黒な服を着た異様な煙突掃除屋という非日常的な人

物の登場である。こうした特別な人間を登場させることによって、家庭の中で接することのできる家族たちとの普段の生活とは違う世界を演出して、興味を持たせ、しかも放置された梯子という面白いアイテムを用いているのである。第二は、現実離れした突飛なフィクションの設定によるユーモアの演出である。煙突掃除屋が梯子をかつぐときに子供に気付かずに持ち運ぶという設定は現実にはほとんどありえないことであるが、こうした非現実性がユーモアの世界には必要なのであろう。ブラウンの「ガチョウの歌」(MU-00007-Das Lied von der Gans)でガチョウのくちばしに武装した騎士が乗っているのと同じであって、ありえないような滑稽さがより大きなユーモアを生み出すと言えよう。こうして見ると、第2画面で掛かっている梯子はかなり長い(15段ほどある)が、第3画面では上にハンスが乗っている形で描かれているのでずっと短くなっており、第4画面では煙突掃除屋とかがれたハンスを大きくズームアップして描き出しているのも、煙突掃除屋の肩から、ハンスの座っているところまで梯子は2段しか描かれていないのであるが、このように同じ梯子が長さを図ごとに変えているのも、フィクション的設定なので許容範囲であると思われる。むしろこうした描き方は芸術的誇張表現として、大きな効果を発揮していると考えるべきであろう。

## (2-2)「ゆらゆらリンヒェン」

この作品(MU-00004-Gaukel-Linchen)<sup>13</sup>も悪い子供の主人公が登場するが、ここでは小さい女の子リンヒェンである。お母さんが、「ロウソクでゆらゆらして遊んではいけないよ」と言う。リンヒェンは「どうしてゆらゆらするのが悪いのだろう」と思う。お母さんが出かけてしまうと、リンヒェンはロウソクをゆらゆらさせ、とうとう火のついた芯に触ってしまう。ここで巨大な(ロウソクの)芯切りバサミが登場し、「火をゆらゆらさせてはいけないよ。そんなことをしたらおまえが燃えだし、私(芯切りバサミ)がおまえをチョコキンと切ってしまうよ」と警告する。その時ロウソク立てが倒れ、言うことを聞かなかった子は火に包まれて

13 Münchener Bilderbogen, Nro. 4, Gaukel-Linchen, Braun & Schneider, München.

しまった。すると、芯切りバサミは大きな口で子供を飲み込み、とうとうその子の姿は消えてなくなってしまった。韻文で書かれた文の最後の節で、この作品でもポツツイはこの絵を見ている子供たちに語りかける。「だから君たち子供たちよ、決して燃える火を手でゆらゆらしてはいけないよ。そんなことしたらすぐに芯切りバサミがやってきて、おまえたちの頭を真っ二つに切ってしまうよ。」これが子供たちに対するこの作品の作者の教訓である。

作品は8枚の小さい図版で構成され、3段に配置されている。上段の左が第1画面である。お母さんが小さい女の子に向かって、「ロウソク立てを持ってくるように」と言い、「ロウソクでゆらゆら遊んではいけない」と注意している。上段中央（第2画面）では、小さい女の子が自分の背丈ほどもある大きなロウソク立てを運んでいる。ロウソクには火が付いている。第3画面は上段右で、お母さんと娘が立っており、お母さんは外出する様子である。中段左（第4画面）はテーブルの上にロウソク立てがあり、その火のついたろうそくを椅子に座ったリンヒェンが見つめているところである。中段中央（第5画面）は他の図よりやや大きな絵で、この絵の一番重要な図版と位置付けられている。真ん中に大きな芯切りバサミが描かれ、それは二つの握り部分を足にして人間のよう立っており、芯切りの真鍮のロウソクを入れる部分が人間の顔のように描かれている。リンヒェンはこの巨大な芯切りバサミと並んで小さく描かれている（Abb. 14）。第6画面（中段右）ではリンヒェンがテーブルの上のほり、手でロウソクの火に触ろうとしている姿が描かれている。下段には二つの絵があり、左（第7画面）では、リンヒェンが両手から火と煙を吐き燃えており、その右からお母さんがあわてて駆け寄る様子である（Abb. 15）。最後の図版（第8画面）では大きな芯切りバサミが横を向き、リンヒェンの身体の上半身をくわえ、女の子のスカートと足だけがこのハサミの口から出ているが見える。図の手前には別の二人の子供が立ち、リンヒェンがハサミに呑み込まれるのをびっくりしてみている（Abb. 16）。

無邪気な遊び盛りの小さな女の子が芯切りバサミに呑み込まれてしまうという悲劇的な結末は小さな子供にとってはショッキングなことであろう。作者はそれだけ強く火遊びをしてはいけないと主張したいのだと

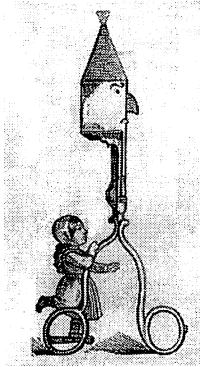


Abb. 14. MU-00004  
-Gaukel-Linchen  
(第5画面)



Abb. 15. MU-00004-  
Gaukel-Linchen (第7画面)

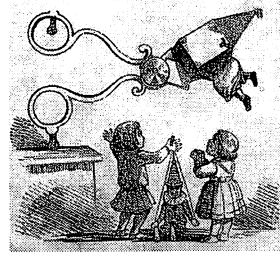


Abb. 16. MU-00004-  
Gaukel-Linchen (第8画面)

思われる。この話はハインリヒ・ホフマンの『もじゃもじゃペーター』(Der *Struwelpeter*, 1844)<sup>14</sup>に登場する「パウリンヒェン」の話と共通点が多い。パウリンヒェンも母親の留守中にマッチで火遊びをし、ミンツとマウンツの2匹の猫が警告するが、結局、服に火が燃え移り、丸焼けになってしまっ、灰になるという短い絵物語である (Abb. 17)。

全般的に見て、ロマン主義の時代の19世紀前半までは子供は無邪気なものとして描かれ、こうした子供向けの絵本や童話においては、子供の主人公が善良で、天使のような存在として描かれることが多いが、『もじゃもじゃペーター』以降、悪戯しかしない悪い子供が登場するようになった。ミュンヘン・ビルダーボーゲンの子供の主人公はほぼこの路線を引き継ぎ、やがてブッシュの作品において、さらにその悪戯を多彩に発揮するのである。多くの場合はこの悪い子供たちは厳しい処分を受け、物語は悲劇的結末となる。

しかし悲劇的結末においても、ユーモア的な部分もある程度は残され

14 Hoffmann, Heinrich: *Der Struwelpeter*, Die gar traurige Geschichte mit dem Feuerzeug, in: Albers, Petra u.a. (hrsg.v.): *Struwelpeter und Consorten*, Gerstenberg Vlg, Hildesheim, 2003, S.15f.



Abb. 17. Hoffmann, *Der Struwelpeter*, Paulinchen (1)

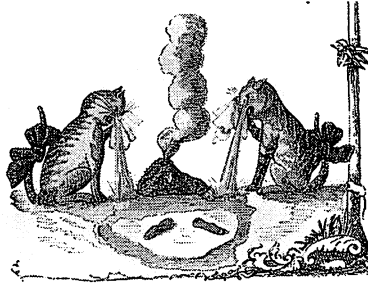


Abb. 18. Hoffmann, *Der Struwelpeter*, Paulinchen (2)

ていて、これはフィクションであるというメッセージが示されている。ホフマンのパウリンヒエンの場合でも全身が燃えると、骨さえも全くなくなり、ひと固まりの灰になってしまい、はいていた靴だけが残ったと、いくらか不自然な描き方である (Abb. 18) が、リンヒエンの場合でも芯切りバサミがリンヒエンの背丈の3倍ぐらいの大きさで描かれ、しかも警告を発するなど道具である芯切りバサミが擬人化されているので、全く非現実的な設定である。この芯切りバサミがリンヒエンの上半身をがぶ飲みにしている最後の図版を見ると、ある意味ではシュールレアリズム的な印象さえ受ける。

### (2-3) 「巨人フラッツフレシウス」

この作品 (MU-00006-Der Riese Fratzfressius)<sup>15</sup> はメルヘン風な物語である。

テキストは下段に短く2行にわたって次のように述べている。

---

15 Münchener Bilderbogen, Nro. 6, *Der Riese Fratzfressius*, Braun & Schneider, München.



昔、シュヴァーベンの国に、凶暴な巨人が住んでいた。名をフラッツフレシウスと言ひ、敬虔な森の修道僧の教室に通う子供たちを食べてしまうのであった。しかしとうとう巨人は、勇敢な騎士ゴードスシュタインとの戦いの末、退治された。

シュヴァーベンの昔話のようであるが、この物話の原典は不詳である。短いストーリーの組み立てから、ポッツィ自身の創作物語かもしれない。ポッツィは学校での勉強をたいへん重視していたのであろう。この作品は、学校に通う子供たちを食べてしまう凶暴な巨人を退治したという、メルヘンによくあるような勧善懲悪の単純な物語である。話の内容は、悪い巨人（悪魔的存在）がキリスト教的世界（修道僧の教室と子供たち）に敵対し、これをキリスト教的騎士が武力で成敗するという、伝統的なもので、特別にポッツィ的な新しさが加えられているものではない。

テキストは短い、この作品は図版に重点が置かれているのであろう。図版の構成は大胆である。全体はおよそ5から7の小さい図版に分けられよう。「およそ」というのは、図版の境目が明白ではなく、見方により続いているとも分けられているとも考えられるからである。

上から3分の2ほどのスペースを使った、中央の画面（第1画面とする）に、ひげを生やした怖そうな巨人がどっかりと座っている。このフラッツフレシウスは腰に大きな獵刀をぶら下げ、パイプで煙草を一服しているところである。腰かけた巨人が背をもたれかけさせている後ろの木は画面の一番上まで伸びており、一続きのように見えるが、この木以外は、作品全体の上から4分の1ほどのところで薄い切れ目があり、その上段部分は右に展開して一つの図版（第2画面）を構成しており、そこには山の上にそそり立つ塔のある中世風の城が小さく描かれている。この第2画面（上段右）ではその塔に向かう急な階段を二人の騎士が槍を担いで登っていく姿が小さく描かれているが、後ろ姿で顔が見えないので、これがゴードスシュタインなのかどうかは判明しない。この城の塔の部分と一続きではあるが、城の塔の下部分は山の中の道が描かれ、4人の子供たちが歩いている（中段右、第3画面）。第2画面と一続きでもあるが、木の柵が仕切りのように描かれている。中央の凶暴な巨人の第1画面と子供たちのいる第3画面との間には、一本の枯れ木が長く

上下に描かれ、二つの図の仕切りとなっている。中央画面の巨人は右向きに座り、その視線は、右側の第3画面の子供たちの方を向いているようである。子供たちの表情は人食い巨人の出現を恐れてか、暗い顔つきをしている。中段左側（第4画面）は、中央画面（第1画面）の巨人の左側であるが、はっきりと仕切りで分けられている。ここでは、老人の修道僧が粗末な小屋のようなところに座り、本を開いて子供たちに読み聞かせている。その周りを行儀よく子供たちが取り囲み、熱心に勉強している様子である。

本来なら第1画面が振り当てられるはずの上段左の図版（第5画面）では、文では後半に登場する馬に乗った騎士ゴーデスシュタインが、颯爽とした姿で描かれている。下段にはゴーデスシュタインとフラッツフレシウスの戦いが描かれている。左（第6画面）に鎧兜で身を固めたゴーデスシュタイン、右（第7画面）に大きな棍棒を持ったフラッツフレシウスが互いに相手に向かっていく様子が描かれている。第6画面と第7画面は立ち木の枠で囲まれており、別々の画面とみることもできるが、お互いに相手に向かって進んでいるところなので、二つで一つの画面と考えることもできる（Abb. 19）。

圧巻はフラッツフレシウスの怖い顔の描写である。大きなげじげじの眉に大きな鼻で、顔の半分ほどの大きさのひげがあり、強烈なインパクトを与え、いかにも怖そうである。この顔は異常に大きく描かれ、第6-7画面でゴーデスシュタインと対峙している姿を見比べると、頭の先からひげまでの長さが、ゴーデスシュタインの兜の先から腰のあたりまでと同じである（面積で比べると、巨人の顔は騎士の顔の10倍くらいはありそうである）。小さい子供に怖い人食い大男のイメージを与えるのに十分な迫力ある姿であろう。

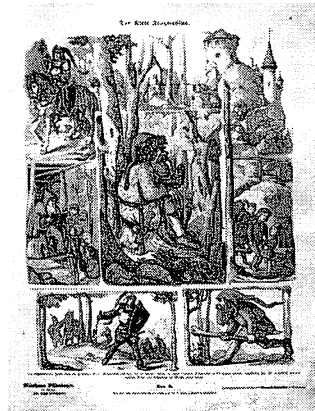


Abb. 19. MU-00006-Der Riese Fratzfressius

(2-4) 「学校を怠けたペーターの話」

この作品 (MU-00012-Die Geschichte vom Peter, der die Schule versäumt hat)<sup>16</sup>は現代の学校を舞台にしている。ペーターは学校へ行かねばならないが、ずる休みして湖へ魚釣りに行く (上段左、第1画面)。学校の先生はペーターが学校にいないので、隣の席の女の子にペーターはどこにいるのかと、尋ねる。しかし女の子は「私、知らないわ」と答える (中段中央、第2画面)。ペーターは湖に着き、とまっていた漁師の小舟に乗り込み、水上の大きな岩まで漕いで行った (上段右、第3画面)。水の中にはたくさんの魚が泳いでいた。煮ても、焼いても、揚げても、燻製にしてもおいしそうな魚ばかりであった (中段右、第4画面)。ペーターはおいしい御馳走のことを考えながら釣り糸を投げ入れた。たくさんの魚の中から特に大きなのがすぐに食いついた。ペーターは逃げられないように懸命に糸を引いた。だがペーターはまだ小さくて力も弱く、とうとう魚に水の中へ引き込まれてしまった (中段左、第5画面)。ペーターが流された近くで、ちょうどその時、二人の漁師が引き揚げ網の漁をしていた。網が重いので漁師たちは「なんと運がいいのだ」と、大漁を喜んだ (下段左、第6画面)。大小の魚に交じって、真っ青な顔のペーターが出てきた。(下段中央、第7画面=子供よりも大きな魚の背中にペーターがのって倒れている)。「もし漁師が網をすくっていなかったら、ペーターは間違いなく溺れていたであろう。だから子供たち、熱心に勉強しなくてはいけない。学校を怠けたりすると、こんなにずぶ濡れになったり、もっと怖いことになるかもしれないよ」(下段右、第8画面=ペーターが湖の岸で立ち上がっているが、全身びしょぬれで、大量のしずくが垂れている)。

この話も学校を怠ける悪い子供の悪童物語である。処罰としては、主人公が死ぬまでには至らないものの、ほとんど溺死寸前という危機に陥り、全身ずぶ濡れという、厳しい結末を与えられる。ポッツィは学校の存在を非常に高く評価していたようで、中央に大きく描かれた第2画面に登

16 Münchener Bilderbogen, Nro.12, Die Geschichte vom Peter, der die Schule versäumt hat, Braun & Schneider, München.



Abb. 20. MU-00012-Die Geschichte vom Peter, der die Schule versäumt hat (第2画面)

場する背の高い学校教師はポッツィの自画像のようである<sup>17</sup>(Abb. 20)。

### (2-5)「青ひげ」

この作品(MU-00095-Blaubart)<sup>18</sup>はペロー(Charles Perrault)のよく知られたメルヘンを図案化したものである。図版は7つで、中段中央にやや小さな絵(第1画面)があり、タイトルの「青ひげ」(Blaubart)と書かれた看板と青ひげの顔が描かれている。看板の下まで伸びた大きなひげが強調されている。後の6枚はストーリーの大事な場面を描いたもので、上段左(第2画面)では、青ひげが鍵を若い妻に渡している(Abb. 21)。上段右(第3画面)は馬に乗った青ひげが描かれているが、これから旅に出る場面のようなものである。中段左(第4画面)では若い妻が、禁じられた部屋の扉を開けるところである。中段右(第5画面)では青ひげが刀を構え、妻がその前で倒れこんでいる様子なので、すでに禁止された扉を開けたことが発覚し、青ひげが妻を処刑しようとしているところであろう。下段左(第6画面)では二人の騎士(妻の兄弟)が城に向かって馬で走っているところである。背景に小さく描かれた城のバルコ

17 Vgl. Rilz, René: *Pocci – Künstler und Kinderfreund*. Nachwort zu: Pocci, Franz Graf von: *Lustige Gesellschaft*, Loewes Verlag, Bayreuth, 1978, S.126.

18 *Münchener Bilderbogen*, Nro.95, Blaubart, Braun & Schneider, München.



Abb. 21. MU-00095-Blaubart (第2画面)



Abb. 22. MU-00095-Blaubart (第7画面)

ニーでは妻の姉が手を振って助けを求めている。下段右（第7画面）では青ひげは床の上にあおむけに倒れ、二人の兄弟が妹である妻を救出して部屋を出ようとしているところである。部屋の大きな柱には殺された前妻たちがつるさされている（Abb. 22）。

テキストは、図版ごとに書かれておらず、上段から中段にかけて、タイトルの第1画面を囲むようにまとめて書かれている。ここには次のように述べられている。

昔、たいへん裕福な一人の騎士がいて、自分の城で栄華な暮らしを送っていた。この騎士は大きな青いひげを蓄えており、このため人々から青ひげの騎士と呼ばれていた。青ひげはこれまで何度も結婚していた。だが、その妻たちは次々に若死にしていまい、どうして亡くなりその後どこ運ばれたのかは誰も知らなかった。さてある日、この騎士がある美しい高貴な令嬢と結婚することになり、盛大な結婚式を挙げた。しばらく月日が経ってのこと、騎士は若い妻に言った。「私は旅にでなくてはならない。この屋敷のことはすべておまえに任せる。ただし、ここに鍵を渡しておくが、一つの部屋だけは立ち入ることを禁ずる。言う通りにしなければ命はないと思え。」

騎士が旅に出してしまったので、寂しくしている若い妻の所へ、妻の二人の兄弟と姉が訪ねてきた。兄弟は狩りに出かけたが、姉は若

い妻に禁じられた部屋を開けるように勧めた。言われるままにそうしたところ、若い妻はその部屋の中に、青ひげの先妻たちが頭をはねられて血まみれになったり、壁につるされたりして死んでいるのを見て、死ぬほど驚いた。鍵が手から滑り落ちてしまい、その血のついた鍵をぬぐおうとしても、どうしてもきれいにならなかった。この時に青ひげが城に戻ってきたのであった。青ひげは容赦せず震える妻を捕まえ、死に支度をせよと命じた。だが姉は胸に不安をみなぎらせ、バルコニーへと急いで登り、助けを求めようとした。かわいそうな新妻はそこで叫んだ。「姉さん、だれか姿が見えませんか?」-「誰もいないわ」と、絶望的な答えが返ってきた。

もう一度、妻が叫んだ、「姉さん、まだだれも姿が見えませんか?」-「砂ほこりがしてる。でも、羊たちよ」、と姉が答えた。

殺人鬼のこぶしに抑えられながら、かわいそうな妻は三度目に叫んだ、「姉さん、まだ誰も姿が見えませんか?」-「二人の騎士が見える。私の合図に気付き、風のように駆けてくる」と返事があった。この時、妻は死に物狂いで青ひげの手を振りほどいて逃げ、部屋の扉に鍵をかけた。その間に、兄弟たちは稲妻のように飛んできて、青ひげが扉をけ破って、刀を引き抜いて中に入ろうとしたちょうどその時に、間に合った。しばらく切り合った後、兄弟たちは残虐な男を切り倒し、妹たちと一緒に立ち去った。城は朽ち果て、だれもそこには立ち入らなくなった。

以上が、この作品のテキストであるが、絵入りの1枚刷りという印刷物のスペースの上から、ペローの話 (*Contes de Perrault*, 1697)<sup>19</sup>がかなり省略されていることが分かる。ドイツではグリムが『子供と家庭のためのメルヘン』初版(1812年)にこの話を採用しており、また、ベッヒシュタインもその『ドイツのメルヘン』(1847年)<sup>20</sup>に収録している。これらの主な相違点を一覧表にすると次のようになるであろう。

---

19 Perrault, Charles: *Sämtliche Märchen*, Reclam, Stuttgart, 1986, S.75ff.

20 Bechstein, Ludwig: *Deutsches Märchenbuch*, tredition, Hamburg, o.J., S.313ff.

	ポッツィ (1852)	ペロー (1697)	グリム (1812)	ベツヒシュタイン (1847)
青ひげの身分	裕福な騎士（貴族）	騎士（大きな屋敷を所有）	王	勢力のある騎士（貴族）
妻の家柄、両親	高貴な（貴族の）令嬢（父母は登場しない）	青ひげの隣人で高い身分の（貴族の）婦人の娘（父親は登場しない）	父は森にすむ年寄りの男性（母は登場しない）	青ひげの隣人で高い身分の（貴族の）婦人の娘（父親は登場しない）
妻の姉	結婚前には登場しないが、途中から登場。最後に妹を助ける	結婚前に青ひげの結婚対象として登場。最後に妹を助ける	登場しない	結婚前に青ひげの結婚対象として登場。最後に妹を助ける
妻の兄弟	2人	2人（竜騎兵と近衛騎兵）	3人	2人（騎士）
結婚から、禁じられた部屋を開けるにいたるまでの経緯	青ひげの留守中に二人の兄弟と姉が訪問。姉が若い妻に部屋を開けるように勧める	青ひげの留守中に近所の人々、友人たちが訪問。客たちを放置して若い妻が好奇心から部屋を開ける	青ひげの怖い風貌を恐れた妻は、結婚するとき、呼んだらすぐに助けに来てもらうという約束を兄弟とする。妻は好奇心から一人で部屋を開ける	青ひげの留守中に二人の兄弟と姉が訪問。姉が若い妻に部屋を開けるように勧める
発覚後の妻の対応	城に居合わせた姉に助けを呼んでもらう。3回助けを呼んだ後、青ひげの手を振りほどき逃げる	死ぬ前に最後の祈りをしたいと言い、時間稼ぎをする。姉に助けを呼んでもらう。その日に兄弟が来るという約束があった。兄弟が来るまで青ひげにとらえられている	死ぬ前に最後の祈りをしたいと言い、時間稼ぎをする。妻自身が窓から兄弟を大声で呼ぶ	禁じられた部屋の扉は一度開けると、魔法がかかって閉めることができない。姉のところへ行き、姉に助けを呼んでもらう。青ひげが階段を上がって来るが、鍵を閉め、姉と一緒に助けを呼ぶ

(次ページに続く)

	ポッツィ (1852)	ペロー (1697)	グリム (1812)	ベツヒシュタイン (1847)
妻の救出方法	姉がバルコニーから助けを呼ぶと、狩りに行っていた兄弟が来て、青ひげを倒す	姉が塔から助けを呼ぶと、来訪を約束していた兄弟が来て、青ひげを倒す	妹の声を聞き、3人の兄弟がやって来て、青ひげを倒す	姉が塔から助けを呼ぶと、狩りに行っていた兄弟が来て、青ひげを倒す
青ひげの死後	青ひげの城は朽ち果てた（青ひげの財産については何も述べられていない）	妻は青ひげの全財産を手に入れ、それを使って、姉を若い貴族と結婚させ、2人の兄を隊長にし、自らは教養ある人と再婚する	青ひげの財産は妻のものとなる	妻は救出されたが、好奇心がもたらしたこの事件を長い間、克服できなかった（青ひげの財産については何も述べられていない）

この比較からポッツィの作品に一番近い設定はベツヒシュタインのものであると考えられる。この比較の中では、青ひげを王（König）と設定しているグリムの話は、兄弟の数も他の場合と違い、ポッツィの作品とはもっとも異なっている。ベツヒシュタインはおそらくペローの作品をいくらか修正して「ドイツ」のメルヘンとしたのであろう。ポッツィはこのベツヒシュタインの話を下敷きにし、前半部分の二人の美しい娘のどちらを選ぶかという部分や、大きなひげを怖がる娘を懐柔しようとして一家を自分の屋敷に招待して楽しく過ごさせ、教養のあるところを見せようとする部分は省略し、すぐに結婚式が行われたと簡略化している。この話は新妻が留守中に禁じられた部屋を開け、そのため殺されかけるという部分が核心なので、前半部分を簡略化するのは、限られたスペースの点でやむを得ないことであろう。後半の核心部分では、姉の勧めで妻が禁じられた部屋を開けるなど、ポッツィの作品はベツヒシュタインとほぼ符合する設定となっている。

## （2-6）「韻と絵による九九」

この作品（MU-00115-117-Das Einmaleins in Reimen und Bildern）は、



3つの版の連続でMU-00115が1. Bogen (第1号)、MU-00116が2. Bogen (第2号)、MU-00117が3. Bogen (第3号)<sup>21</sup>である。第1号 (MU-00115) では本来の九九の前に、次のような前置きがある。

「これまでの九九はとても難しく、／まるでカタツムリの歩みのようにしか進まない。／何日もうろうろして、やっとのことで、／少しずつ君たちの頭に入って来るものだった。／だが、今や新しい時代が／別の九九を生み出した。／この新しく塗り直された九九は、／飛ぶようにどンドン君たちの頭に入ってくるだろう。」

九九の本文は、1画像につき、それぞれ2行ずつで、1行目は九九の数式がそのまま述べられ、2行目には内容的には全く無関係であるが、最後の単語が1行目と同じ韻で終わる文が並べられている。これにそれぞれ滑稽な絵が添えられている。最初の部分だけ紹介すれば次のようなものである。

(第1画面) 1 mal 1 ist eins. / Ich bin der Gott des Weins. (1 × 1 は1。私はワインの神である。)

横倒しの大きなワインの樽の上に、ブドウの房のような頭飾りと腰ベルトを着けた人物が馬乗りになって座り、大きなジョッキを傾けて酒を飲んでいる。樽の左側では男の子がこれを見てびっくりしたように両手をあげている (Abb. 23)。

(第2画面) 2 mal 2 ist vier. / Im Zorne brüllt der Stier. (2 × 2 は4。牛が怒って吠えている。)

まっ黒で、大きく、強そうな牛が、頭を下げて突進する様子で、その手前には逃げようとする男性の後ろ姿が描かれている。

(第3画面) 2 mal 3 ist sechs. / Zum Blocksberg fährt die Hex'. (2 × 3 は6。ブロック山に魔女が行く。)

怖い顔をした魔女が髪をなびかせ、ほうきに乗って空を飛んでいる。

このように2行の詩句の行末の韻を踏んで、数字と他の同じ音の単語

---

21 Münchener Bilderbogen, Nro.115-117, Das Einmaleins in Reimen und Bildern, Braun & Schneider, München.



1 mal 1 ist ein,  
Ich bin der Gott des Weins.

Abb. 23. MU-00115-Das Einmaleins, 1. Bogen (第1画面)

との連想で答えを覚えようという方法である。1種の記憶術ではあるが、答えの数字が第1行の最後に来ているので、答えの数字だけが連想の対象となり、掛け算の問題の方の数字は連想の対象とはならない。日本の電話番号などの覚え方のようにすべての数字にからませた語呂合わせでない、式の方がうまく覚えられないのではないと思われる。

またポッツィはこの新しい九九の覚え方が、子供たちの頭にどんどん入ってくる、と言っているが、ポッツィがここで示す方式には二つの問題点があるのではなかろうか。一つはドイツ語では20以上の数字の場合、たとえば21は *einundzwanzig* (1と20) のように、1の位の数が前に来て10の位が最後にくるので、必ず *-zig* (*-big*) が数字の最後になり、したがって韻も必ず同じ音になってしまうことである。実際にポッツィの描いてみるものを見ると、20以上(90まで)の答えになる場合では、韻の相手は *sich*, *ich* など同じような言葉が繰り返されるのである。3号あわせて全部で46の数式が描かれていて、このうち *-zig* (*-big*) が答えとなり1行目の最後にくるものが31あるが、このうち „*ich*“ (私) が2行目の韻の相手となっているものが12あり、„*sich*“ (それ自身、お互いに) が相手となっているものが15ある。また10および13-19は必ず *-zehn* が最後につくので、これに該当する数式は、全部で7つあるが、このうちの3つの韻の相手は *seh'n* であり、2つが *steh'n* である。これではせつ

かくの韻によって、記憶術に訴えようとしても、何度も同じ言葉の繰り返しで、新鮮な印象を与えることはできない。

いま一つの問題点は、韻の対象となるおもしろい単語が見つからなかったのかもしれないが、子供にはふさわしくないような言葉が少なからず出ていることである。最初の句からして、「ワイン」というアルコールが登場し、しかも「神」という絶対的な存在を持ち出すのであるから、アルコール讃美をしているように思われる。2×5の「口髭」を回して整えるというの、子供とは直接かわりがないであろう。6×6と6×7も酒場で親父が酒を飲んでいる場面であり、あまり教育的とは言えない。

「韻と絵による九九」というポッツィの「新しい」方式は、脚韻という点ではあまり成功していないように感じられるが、滑稽な絵はおもしろいものが多い。この作品はむしろ「絵による九九」という点に新しさと魅力があるのではないだろうか。

## (2-7) 「ヴァイオリンを持った小さなフリーダーの話」

この作品 (MU-00122-Das Märlein vom kleinen Frieder mit der Geige)<sup>22</sup> はA.L. グリムのメルヘンの図案化である。画像は大きな1枚で、上から3分の2ほどを占め、下の3分の1ほどのスペースにぎっしりとテキストが次のように書き込まれている。

昔、がに股の小さな少年がいた。その子はフリーダーという名前であったが、その子の両親はすでに死んでしまっていた。そのためフリーダーはあるお百姓の所で奉公をした。3年たち、フリーダーは、もうここでは十分だと思い、遍歴の旅に出ることにした。雇い主に報酬を求めたところ、1年の奉公につき1ヘラー、合計3ヘラーの銅貨をもらった。フリーダーはこのお金を革の財布に入れ、お百姓と奥さんに別れを告げ、道を歩いて行った。その道を行くと、山

---

22 Münchener Bilderbogen, Nro.122, Das Märlein vom kleinen Frieder mit der Geige, Braun & Schneider, München.

のふもとに峡谷があり、そこは山の精のネーベルカップが旅人たちをしばしばからかい、足止めするところであった。フリーダーも同じ運命となり、そのため3ヘラーのお金をいやおうなしに差出さねばならぬことになった。その代わりに山の精ネーベルカップは、りっぱな鳥打の吹き矢の筒1本とヴァイオリンを1台くれた。そのヴァイオリンを弾けば、誰でも好むと好まざるとにかかわらず飛びあがり、踊らねばならないのであった。山の精はさらにフリーダーが最初に願ったことは必ず成し遂げられるということまで授けてくれた。この取引はまんざら捨てたものではなかった。しばらくすると、フリーダーは高い木の下に立っている長いひげの男に出会った。木の上では金色の小鳥が美しい声で歌っていた。「無限の力よ、どうかあの鳥が手に入ったなら」と男は独り言を言っていた。小さなフリーダーはすぐに決心して、吹き矢で小鳥を撃った。鳥はイバラの茂みに落ちた。見知らぬ男はすぐにそこへ走り寄って、小鳥を拾い上げようとした。そこで少年は「待ちなさい、あなたに1曲弾きましよう」と言って、ヴァイオリンを弾き始めた。男はいやおうなしに手足を上げ下げして飛び跳ね始めた。イバラの茂みでその髭と衣服はズタズタになり、顔もひっかき傷ばかりとなった。「いたい、いたい。ヴァイオリンを弾くのをやめてくれ。私の踊りを止めてくれたら、金貨の入った私の財布をやるから」と男は叫んだ。そこでフリーダーはヴァイオリンを弾くのをやめ、男は踊るのをやめた。男は立ち去り、フリーダーは演奏で報酬を得たことを喜んだ。しかし男は悪い奴で、裁判官の所へ駆け込み、ヴァイオリン弾きが自分から金貨の入った財布を盗んだかのように訴え、少年を逮捕させた。裁判はすぐに終了となり、あわれなフリーダーは直ちに絞首台に立たされることになった。そこで少年はもう一度だけヴァイオリンを弾かせてほしいと、裁判官に頼んだ。裁判官はそれを拒むことはできず、そのためすべての人が踊り始めることになった。裁判官も死刑執行人も刑吏も警備官も、老いも若きもすべての人が踊り、そして悪い見知らぬ男も再び踊らねばならなかった。「やめろ、やめろ。君は無罪釈放とする。約束するぞ」と裁判官が叫んだ。裁判官が踊りを終え一息入れると、今度は告訴をした男に激しい非難が向けられた。

というのもこの男こそその金貨を盗んでいたのであり、正真正銘の悪者と認定されたのであった。この男にこそ絞首台が正しく用意された。フリーダーは気分良くそこから立ち去り、その後はまじめに生活の糧を稼いだ。というのもフリーダーがヴァイオリンを弾けば、どこでもその場が楽しくなったからである。やがて小さなフリーダーも死ぬことになったが、もちろんそれは絞首台の上ではなかった。フリーダーはりっぱに埋葬され、彼が墓穴に入れられるとヴァイオリンの弦はすべてはじけ飛んだ。

図版は大きな1枚であり、大きな絞首台が描かれているので、まずそれに眼を奪われてしまうが、よく見ると端の方に、この物語のいくつかの重要な場面が書き込まれている。(1)画面の左上に小さく遠景のように描かれているが、農家の前に百姓の夫婦と小さな少年が立っている。これは3年間奉公してフリーダーが農家を去る場面であろう。(2)画面の上方の背景の山の上に、小さく目立たないように薄い色で、フリーダーが崖の上の岩に座り、雲のような姿の山の精ネーベルカップと話をしているのが描かれている。(3)画面の右上、絞首台の右側の小さなスペースに森の木が描かれ、そこにヴァイオリンを弾く少年と踊っているひげ男が描かれている。(4)図全体の左側の4分の1ぐらいの場所には建物が描かれ、その建物は裁判所のように、その中では、裁判官らしい恰幅のいい人物が壁を背にして座り、その前に告訴人のひげ男、そしてその手前にヴァイオリンを持ったフリーダーが描かれている (Abb. 24)。(5)そして中央に大きくスペースが充てられているのは、もちろんクライマックスである絞首台の場面である。左の裁判所との釣り合いをとるためか、絞首台は中心からやや右側に置かれ、大きくそそり立っている。絞首台には梯子が掛けられ、首吊りのロープを前にしてその梯子の上方で、フリーダーがヴァイオリンを弾いている。その下の梯子の右側にひげ男の悪者が踊り、梯子の左側には裁判官が踊っている。梯子の周りでは武装した警備兵や一般市民の人たちが大勢踊っている (Abb. 25)。金貨のようなものをばらまきながら踊っている人や、背中に背負ったかごに入れている子供を振り落としそうになっている女性たちなど、滑稽な姿によってもポッツィのユーモアが感じられるが、絞首台の上には横になって寝そ



Abb. 24. MU-00122-Das Märlein vom kleinen Frieder mit der Geige (詳細 1)



Abb. 25. MU-00122-Das Märlein vom kleinen Frieder mit der Geige (詳細 2)

べっている道化のような人物が一人、そして裁判所では建物の柱にからみついている道化的な滑稽な人物が一人、それぞれ描きこまれており、高級官僚であるポッツィが裁判所や死刑制度を茶化しているようでたいへん愉快である。この描き方はおそらくこの話の内容である裁判官の誤審と冤罪とに深く関わっているのであろう。

なおこのメルヘンはアルベルト・ルートヴィヒ・グリム (Albert Ludwig Grimm, 1786-1872) の『リーナのメルヘン本』 (*Lina's Märchenbuch*) が原典<sup>23</sup>である。このメルヘンはかなり長い話なので、ポッツィはこれを大幅に省略している。このメルヘン本との主な違いを記せば次のようになる。

(1)山の精とフリーダーとの取引については、メルヘン本の叙述の方がかなり詳しい。山の精とフリーダーは1ヘラーごとに取引をする。つま

23 Grimm, Albert Ludwig: *Lina's Märchenbuch: Eine Weyhnachtsgabe*, Volume 1, NabuPublic Domain Reprints (o.J.), Printed in the USA, S.155ff.

り最初の1ヘラー銅貨で、フリーダーは必ず鳥を打ち落とすことのできる魔法の吹き矢の筒を手に入れる。2番目の1ヘラー銅貨で、どんな人でも必ず踊りだす魔法のヴァイオリンを手に入れる。最後の1ヘラー銅貨で、フリーダーは最初の願いが必ず聞き入れられるという約束を手に入れるのである。(2)ポッツィではフリーダーが魔法のアイテムを手に入れて最初に出会うのは金の鳥を欲しがる髭の男（金貨を盗んで持っている悪い犯罪人でもある）であるが、メルヘン本では、修道僧である。この修道僧は托鉢で集めた卵や干し肉やお金を持っているのであるが、森の中で太った野鳩を見つけ、これを食べたいためにフリーダーに鳩を吹き矢で射落としてくれと言うのである。フリーダーが今は断食の時期で、肉を食べるのは禁じられているのではないかと言うが、修道僧は誰も見ていないのだから構わないと言う。つまりこの修道僧は強欲で戒律も顧みない不届きな男なのである。フリーダーはこの修道僧を懲らしめるために野鳩をイバラの中へ射落とし、それを僧が取りに行ったとき、ヴァイオリンを弾いて、僧を痛めつけるのである。僧は托鉢で集めた金をフリーダーに渡すと約束してヴァイオリン演奏をやめてもらうが、いざ金貨を渡す段になるとこれを流し、再びヴァイオリンで脅されてやっとのことで金貨を渡すというようにしぶとい僧とのやり取りが展開される。(3)メルヘン本では町へやって来て、裁判官に訴えるのはもちろん修道僧である。裁判官は流し芸人のヴァイオリン弾きよりも修道僧の言うことを信じる。フリーダーは山の精との約束で最初の願いはかなえてもらえらるという自信があるので、裁判では告訴人の言ったことを認め有罪判決を受け入れる。それは最後に修道僧の悪徳ぶりを暴露するためであった。いよいよ絞首台の梯子を上っていったときに、フリーダーは最初の願いを裁判官に対して申し出る。それは死刑の前に一度だけヴァイオリンを弾かせてくれということであった。悪い修道僧は裁判官にヴァイオリンを弾かせてはたいへんなことになるかと警告するが、山の精との約束通り、フリーダーの願いはかなえられ、ヴァイオリンが持ってこられて、フリーダーはこれを弾く。(4)メルヘン本での結末はポッツィとは異なっている。ポッツィのように裁判官が無罪放免を言い渡して、ヴァイオリン演奏が止められるのではなく、メルヘン本では裁判官も踊りが楽しくて、いつまでも踊り続けるのである。とうとうみんなが踊り疲れて倒れるまでヴ

ァイオリンは弾き続けられ、フリーダーはほかの町へ行ってしまう。その町でヴァイオリン演奏をして金を稼ぎ、その後どこへ行っても人気を得て、年を取るまで楽しく暮らしたということになっている。(5)メルヘン本では敵対者の修道僧に対する処刑は行われぬ。太った修道僧は息が切れるほど踊って最初に地面に倒れたという記述で終わっている。

ポッツィが修道僧を悪い泥棒に変更しているのは、おそらくキリスト教会(修道院)に対する政治的配慮からであろう。その他の変更点は、主として短縮するためのもので、ほぼ原典の主旨をポッツィは引き継いでいると言える。

## (2-8)「みつけ鳥」

この作品 (MU-00204-Fundevogel)<sup>24</sup>はグリム・メルヘン (KHM 51)の図案化である。図版は大きく2段に分けられ、上段に3枚下段は小さな図版で5枚あり、全部で8枚であるが、これらの図版は大きさも順序も多様化されている。

上段中央に一番大きな図版(第1画面)が配置され、そこでは上に「みつけ鳥」という表題が掲げられ、多くの木がある森の風景を背景にして、中央に大きく獵師が立っている。この男性が見上げている視線の先を見ると、タイトルのすぐ下の木の枝の所に子供が座っているのが分かる。上段左が第2画面で、悪い料理女が水をくむため大きな桶を持って井戸の前に立っているところである。井戸の後ろの建物に小さな窓があり、二人の子供がのぞいている (Abb. 26)。下段の左端が第3画面で、二人の子供が家から逃げ出すところである。上段右が第4画面で、料理女の命令に従って、子供たちをさがしに行く3人の下男たちが野原を歩いていく様子が描かれている。第5画面は下段の右端である。森の中で3人の下男が子供たちをさがしているが、二人の子供は木の陰に隠れている。第6画面は下段の左から2枚目で、大きなバラの木が描かれ、そのバラの木の真ん中の一つだけ大きなバラの花が咲いている。第7画面は下段の右から2枚目で教会が描かれて、教会の中央の窓から、その中に王冠

---

24 Münchener Bilderbogen, Nro.204, Fundevogel, Braun & Schneider, München.





Abb. 26. MU-00204-  
Fundevogel (第2画面)

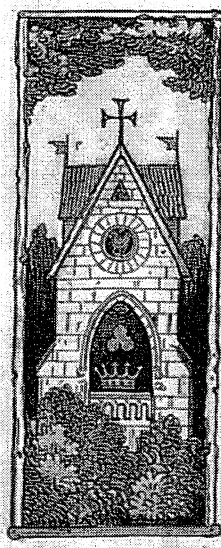


Abb. 27. MU-00204-  
Fundevogel (第7図)



Abb. 28. MU-00204-  
Fundevogel (第8画面)

があるのが見える (Abb. 27)。第8画面は下段中央で、料理女が池にはまり、その頭をカモがくちばしでつついている様子を示している (Abb. 28)。

図版の順序がばらばらなので、テキストは図版の位置とは対応せず、独立して、上段の第2と第4画面の上、および上段と下段の図版の間の空間に、分けられて記入されている。テキストはグリムのメルヘンと似ている部分もあるが、いくらか変更が加えられている。異なっている主な点をあげれば次のようになる。(1)グリムでは料理女が登場するとき何の説明もないが、ポッツィでは猟師の妻は早く死んでしまっていたので、家政婦として年取ったザネがいたという説明が加えられている。(2)グリムではどうしてザネが男の子(みつけ鳥)を殺そうとするのか理由が描かれていないが、ポッツィではザネが猟師の娘(レンヒェン)だけでもたいへんなのに、これ以上世話をするのはたいへんだと言って「みつけ鳥」を恨んだためという説明がある。(3)グリムでは大量の水を汲ん

でいるザネにレンヒェンがどうしてかと尋ね、ザネは誰にも内緒にするようにと約束させて、「みつけ鳥」を煮て殺すという計画を打ち明けるのに対して、ポッツィでは井戸が擬人化されて「私のきれいな水がかわいい坊やのために使われるなんて残念だ」と話すのを、窓の所から二人の子供（「みつけ鳥」とレンヒェン）が聞いて、殺害計画が発覚し、子供たちが逃げ出すという設定になっている。したがって、グリムのようにレンヒェンが誰にも言わないと約束したのに、大好きな「みつけ鳥」の命に関わるので、この男の子にこっそり打ち明け、二人で逃亡するという、約束破りはポッツィの場合は回避されている。(4)グリムでは、バラの木とバラの花になった子供たちを下男たちが分からず、ザネにそれを報告すると、ザネはバラの木を切り、花をちぎって持って来いと、残酷なことを言い、また教会と王冠に変身した子供たちを下男たちが分からず、ザネに報告すると、教会を壊し、王冠を持ってこいと乱暴なことを言うが、ポッツィではこの残酷な破壊的な言葉の部分は省略されており、ともに発見できなかったというだけで済まされてしまっている。(5)ザネが池でおぼれ、助かった子供たちは家に帰るが、グリムでは、子供たちが死んでいなければ、今もまだ生きているという言葉で締めくくられるが、ポッツィでは、猟師の父親と幸せに暮らし、その父親が死んだあと、「みつけ鳥」とレンヒェンが結婚して、死んでいなければ、今も生きている、という結末になっている。

このように残酷な部分や、約束を破るようなつじつまが合わない部分は省略され、逆に、猟師の妻が早く死んだとか、最後に「みつけ鳥」とレンヒェンが結婚したことにするなど、メルヘン風な設定を強化し、整合性を強めているという点で、ポッツィはメルヘンを理想化しようとする傾向にあったと思われる。図案化の点ではポッツィは悪いザネや愚かな下男たちを戯画的に描き、ポッツィ独自の面白い人物像を作り出している。特に第8画面の池にはまって両手をあげ上から木の枝にとまったカモがその頭のとっぺんをくちばしでつついている場面はユーモアにあふれているように感じられる。

(2-9) 「ツグミ髭の王」

この作品 (MU-00220-König Drosselbart)<sup>25</sup> もグリムのメルヘン (KHM, 52) に依拠したものである。図版は上下に4段で、それぞれの段に1枚ずつ横長の図版が描かれている。

第1段目の絵 (第1画面) は上部がアーチ形に丸くなっており、王と王女が台座の上の一段と高いところに配置され、この周囲を多く (11名の男性が確認できる) の求婚者の男性が取り巻いている。中央の台座の前面の部分が白抜きにされ、そこにタイトルの「ツグミ髭の王」(König Drosselbart) という文字が書き込まれている。この話の主人公ツグミ髭の王は画面の右から3人目で前面に立ち、ほかの求婚者たちに比べて目立つように描かれている。第2段の絵は一続きであるが、木の幹で左右に二つに分けられている。第2段左 (第2画面) では辻音楽師と王女が道を歩いているところである。背景の城や町を見渡す山道のようなところである。第2段右 (第3画面) では辻音楽師の小さな家の前で暮らす二人が描かれている。辻音楽師は家の前に腰かけて、マンドリンのような楽器を弾いており、王女は重い荷物を背負って、家の前に立っている。第3段目の図版 (第4画面) では軽騎兵が馬に乗って、市で陶器を売っている王女の所へ走っていく図である。中央に大きな馬とそれに乗った軽騎兵、右側にそれを避けようと体をひねった姿の王女が描かれ、馬の足元にはたくさんの皿や壺が壊されている。背景の狭い市の広場では何人も人が乱暴な馬に驚いている様子である。この絵の左右の端には柱があり、その前に門番のように二人の道化姿の男性が立っている。このため、まるでこの市の軽騎兵の図が、芝居の枠の中に入っているように演出されている (Abb. 29)。この乱暴行為が実はツグミ髭の王による芝居であることを示しているのであろうか。あるいはこの物語全体が作り話であることを示し、この図版を客観的に見るため、観察者に距離を取るように仕向け、「異化効果」を狙ったものなのかもしれない。いずれにしても登場人物と直接関係のない道化をここで持ち出しているのは、ポッツィのユーモアの表れであろう。

25 Münchener Bilderbogen, Nro.220, König Drosselbart, Braun & Schneider, München.



Abb. 29. MU-00220-König Drosselbart (第4画面)



Abb. 30. MU-00220-König Drosselbart (第5画面)

第4段目の図版(第5画面)はツグミ髭の王と美しい王女との結婚式の場面である。新婚のカップルが中央に配置され、全体は豪華の花飾りや幕で囲まれている。結婚式に列席している男性や女性の着飾った貴族たちが新郎新婦の前後に描かれているが、左手前にピエロ帽を手に持った道化のような男性がいるのが滑稽さを生み出している。これもバイエルン宮廷の上級式部官であったポッツィのユーモアなのであろう。ポッツィは祭礼の時の儀式ばった堅苦しさは好まなかったのではないだろうか。形式主義へのポッツィの皮肉とも解釈できよう。

テキストは中央に配置された図版を挟むように図版の両側に柱のように細長く書かれている。ビルダーボーゲンとしてはかなり文字の多い作品で、グリム・メルヘンの最終版(第7版)にかなり忠実な記述がなさ

れている。冒頭の部分でも王女が、最初の求婚者に「ワインの樽」、2人目に「のっぽでふらふら」、3人目に「ずんぐりで、ぶきっちょ」、4人目に「青白い死神」、5人目に「赤い鶏」、6人目に「ストーブで乾かした生木」とひどいあだ名をつけからかうという文言は、ここでも残らず記載されている。父の王が王女を辻音楽師に嫁がせる場面や、辻音楽師の家で、最初は柳の枝でかごを作り、次に糸をつむぐ場面などではいくらか簡略化されているところもあるが、重要な部分はほぼグリムのメルヘンの通り記入されている。

[図版出典]

- Abb. 1-2. Münchener Bilderbogen, Nro. 1, Braun & Schneider, München
- Abb. 3. Clemens Brentano: *Gockel Hinkel Gackeleia, Märchen, Mit Initialen und Lithographien von Caspar Braun nach Entwürfen von Clemens Brentano, inseltaschenbuch 47, 1977 (2. Aufl.), Insel, Frankfurt/M., S.39.*
- Abb. 4-6. Münchener Bilderbogen, Nro. 7, Braun & Schneider, München
- Abb. 7. Münchener Bilderbogen, Nro.10, Braun & Schneider, München
- Abb. 8-9. Münchener Bilderbogen, Nro.45, Braun & Schneider, München
- Abb. 10. Münchener Bilderbogen, Nro.47, Braun & Schneider, München
- Abb. 11-13. Münchener Bilderbogen, Nro. 2, Braun & Schneider, München
- Abb. 14-16. Münchener Bilderbogen, Nro. 4, Braun & Schneider, München
- Abb. 17-18. Hoffmann, Heinrich: *Der Struwwelpeter, Die gar traurige Geschichte mit dem Feuerzeug*, in: Albers, Petra u.a. (hrsg.v.): *Struwwelpeter und Consorten*, Gerstenberg Vlg, Hildesheim, 2003, S.16.
- Abb. 19. Münchener Bilderbogen, Nro. 6, Braun & Schneider, München
- Abb. 20. Münchener Bilderbogen, Nro.12, Braun & Schneider, München
- Abb. 21-22. Münchener Bilderbogen, Nro.95, Braun & Schneider, München
- Abb. 23. Münchener Bilderbogen, Nro.115, Braun & Schneider, München
- Abb. 24-25. Münchener Bilderbogen, Nro.122, Braun & Schneider, München
- Abb. 26-28. Münchener Bilderbogen, Nro.204, Braun & Schneider, München
- Abb. 29-30. Münchener Bilderbogen, Nro.220, Braun & Schneider, München

## Kaspar Braun und Franz von Pocci in Münchener Bilderbogen

Yukihiko USAMI

Ende der 1840er Jahre gab der Verlag Braun & Schneider die ersten Ausgaben der Münchener Bilderbogen heraus, und bis Anfang des 20. Jhs. wurden über 1200 Nummern regelmäßig gedruckt und verkauft. Der Münchener Bilderbogen erschien etwa ein Viertel Jahrhundert später als der Neuruppiner Bilderbogen von Gustav Kühn. Die Zahl der Ausgaben betrug etwa ein Neuntel von Kühns Bilderbogen, von denen über 10000 Nummern erschienen. Allerdings sind die Münchener Bilderbogen von wesentlich besserer Qualität, denn sie wurden von sehr qualifizierten und zum Teil sehr bekannten Malern wie Moritz von Schwind angefertigt.

Während die Offizin Gustav Kühn inhaltlich mannigfaltige Werke auf vielen Gebieten wie religiöser und weltlicher Erziehung, aktuellen Nachrichten, Lob der königlichen Familie, literarischem Vergnügen, Basteleien, Spielbrettern usw. herausgab, beschränkte sich der Verlag Braun & Schneider im Wesentlichen auf zwei Genres: Literarisches Vergnügen und Erziehung wie Sprichwörter oder Sachkunde. Vermutlich war es das Prinzip der Produktion bei Braun & Schneider, die billige populäre Publikationsform des Bilderbogens mit erstranger Kunst zu verbinden. Die Beschränkung der Themen und die Ausarbeitungen bekannter Künstler stehen miteinander im engen Zusammenhang. Um auf das künstliche Niveau aufrecht zu erhalten, vermied der Verlag vermutlich die aktuellen Nachrichten aus der Politik, den Kriegen und sozialen Tagesereignissen.

Weiterhin fällt auf, dass in vielen Bilderbogen des Verlags Braun & Schneider eine scharfe Satire vorkommt, und man kann daher die Satire als ein weiteres Grundprinzip der Münchener Bilderbogen bestimmen. Diese Haltung hängt mit dem Vermeiden von Themen wie religiöser

Erbauung oder Lob der königlichen Familie zusammen. Die zivile Erziehung in den Münchener Bilderbogen war im Unterschied zur Neuruppiner Ausgabe, wo es dem Biedermeier eigentümlich in der Hauptsache um die Erziehung des Familienglücks und dabei wiederum besonders um die Gehorsamkeit der Frau ging, wesentlich individueller und sozialkritischer.

In der vorliegenden Arbeit werden die Eigentümlichkeiten der Münchener Bilderbogen anhand der Werke von Kaspar Braun und Franz von Poggi untersucht. Es handelt sich um Brauns Arbeiten: „Der Gockel“, „Das Lied von der Gans“, „Das Zauberpferd“, „Die Geschichte von der großen Wurst“, „Herr Poschius und sein Rock“ und „Die große Rübe“ sowie um Poggis Arbeiten „Der schwarze Mann“, „Gaukel-Linchen“, „Der Riese Fratzfressius“, „Die Geschichte vom Peter, der die Schule versäumt hat“, „Blaubart“, „Das Einmaleins in Reimen und Bildern“, „Das Märlein vom kleinen Frieder mit der Geige“, „Fundevogel“ und „König Drosselbart“.